The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	マリオ・デ・アンドラーデ : 楽観と悲観のあいだで
Author(s)	平田, 恵津子
Citation	ブラジル研究. 2006, 1, p. 29-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98378
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

マリオ・デ・アンドラーデ
楽観と悲観のあいだで[1]

平田　惠津子

はじめに

１８２２年にポルトガルから政治的独立を果たして以来、ブラジルで生み出されてきた文学作品を時間軸に沿って俯瞰すると、そこにひとつの系譜が存在することに気づかされる。それは、ブラジル知識人の意識の底に脈々と流れる「ブラジルとはどのような国なのか」、「ブラジル人とはどのような民族なのか」という問いに、文学の言葉を使って答えを求めようとする作家たちの創造的、かつ想像的な営みの歴史である。創作をつうじて自国文化と民族を定義しようとする彼らのオブセッションに近い欲求の裏にあるのは、自分たちの存在の「あいまいさ」に起因する不安、一種の居心地の悪さであろう。このあいまいさについて文学批評家アントニオ・カンディド(Antônio Cândido)は、「われわれの文化には根本的なあいまいさがある。われわれがヨーロッパ文化を受け継ぐラテン民族でありながら、プリミティヴな文化、つまりインディオとアフリカの文化に影響を受け、熱帯に住む混血民族であるというあいまいさである」[2](Cândido 1985: 119) と述べている。

そして、その「あいまいさ」を解消しようとするかのように、詩人や作家は様々なブラジル人像を描き出してきた。ただ、それはブラジルを植民し、支配した旧宗主国ポルトガル、ひいてはヨーロッパ文化を尺度として行なわれてきたこと、つまり、ブラジルのエリートたちがつねにヨーロッパ的視線で自国をながめてきたことをここで強調しておきたい。

文学史に残る「ブラジル人的」登場人物のイメージの変遷は、文学を舞台に繰り広げられてきたブラジル人の民族的特性に関する議論が、楽観と悲観という両極のあいだを揺れてきたことを示す。ロマン主義初期には独立直後の精神の高揚を反映して、楽観的ナショナリズムに満ちた詩や小説が書かれ、生命力あふれる熱帯の自然を背景に、ブラジル民族のルーツとして美化された誇り高き先住民族インディオのドラマが高らかにうたわれた。なかでも国民的作家ジョゼ・デ・アレンカール(José de Alencar)が生んだイラセマとペリ[3]は今日までブラジル人に親しまれてきたインディオのヒロイン、ヒーローである。

一方、１９世紀後半に成立した自然主義文学は、ロマン主義に見られた非合理的な理想化に反発し、当時西欧で主流だった人種差別的な科学思想を根拠に、ブラジル人の混血性を否定的にとらえた悲観主義が作品に色濃くあらわれている。アルイージオ・アゼヴェード(Aluísio Azevedo)はその代表作『貧乏長屋』(*Cortiço*: 1890) で、同じ長屋に住む誠実で勤勉なポルトガル移民ジョアキンを堕落させ－小説で彼は「ブラジル人化した」と書かれている－その家庭を崩壊させる情熱的な混血女性リタ・バイアーナを描いた。リタ・バイアーナは熱帯の官能を象徴するものとしてブラジル文学にしばしば現われる若いムラタ(白人と黒人の混血女性)像の典型である。

２０世紀に入ると、再びロマン主義的理想化の動きが台頭してくる。独立４００年を記念して出版されたアフォンソ・セルソ(Afonso Celso)の『なぜ私は私の国を絶賛するのか』(*Porque me ufano do meu país?*)はブラジルの自然の美しさや資源の豊かさ、民族の美徳を過度に賞賛した評論で、出版後すぐにベストセラーとなった。この本は今日ほとんど読まれていないが、タイトルからつくられた言葉「ウファニズモ」(ufanismo)は、自国の優越性を極端に誇示する態度や考えを揶揄する言葉として定着している。当時、このウファニズモ的傾向に真っ向から異議を唱えたのが作家モンテイロ・ロバート(Monteiro Lobato)であった。彼は愛国心も公共心もなく「最小限の努力の法則」で生きる怠惰な農民ジェッカ・タトゥー[4]を創造し、その生態をユーモアと苛立ちを交えながら描いた。ロバートにとって、近代化についていけないジェッカ・タトゥーこそ、４００年にわたる建国の歴史が生んだ民衆の典型であると同時に、国の後進性の象徴であった。ロバートと同時代の作家リマ・バレット(Lima Barreto)も『ポリカルポ・クワレズマの悲しき最期』(*Triste fim de Policarpo Quaresma*: 1915) を執筆、極端な理想主義的愛国心ゆえに国に裏切られ命を失うブラジルの悲しきドンキホーテ、ポリカルポ・クワレズマを描き、非現実的な愛国精神を皮肉った。

しかし、１９２０年代、ブームにわくコーヒーの輸出がもたらした富と繁栄を原動力とし、急速な近代化と都市化が進んでいたサンパウロを舞台に芸術のモダニズム運動が展開すると、再び楽観的ナショナリズムの気運が高まり、とりわけ１９２４年以降、文学・音楽・美術などあらゆる芸術分野においてブラジルの熱帯の活力と民族の混交が肯定的に表現されるようになる。なかでも、ブラジル文化の原始主義を称揚したオズワルド・デ・アンドラー

デ(Oswald de Andrade)のふたつの宣言ー「パウ・ブラジル宣言」(“Manifesto Pau-Brasil”)と「人食い宣言」(“Manifesto Antropófago”)はエポック・メーキングなものとなり、ブラジル文化と民族をめぐる議論に大きな影響を与えた。とりわけ後者は文芸誌『人食いの雑誌』(*Revista de Antropofagia*)の刊行につながり、数々の「人食い」作品の誕生をうながした。

本稿ではこの時期の最高傑作マリオ・デ・アンドラーデ(Mário de Andrade)の小説『マクナイマー特性（徳性）のないヒーロー』（*Macunaíma – herói sem nenhum caráter;* 以下『マクナイマ』と略す）を取り上げ、この作品が『ブラジルの肖像』(*Retrato do Brasil*)の著者パウロ・プラド(Paulo Prado)に捧げられていることに注目し、ふたりの作品の底流として存在する自国民に対する悲観的な見方が共鳴しあっていることを指摘しつつ、しばしば「人食い的」と称されるこの作品が必ずしも当時の潮流にしたがっていないことを論証したい。

第１章　「モダニズムの法王」マリオ・デ・アンドラーデ

ブラジルモダニズム運動の旗手マリオ・デ・アンドラーデは、２０世紀前半、ブラジル文化の多方面でもっとも刺激を与えた革新者のひとりであった。詩人、小説家、文芸批評家、音楽・舞踊研究家、民俗学者として幅広い活動をおこなったマリオ[5]は、膨大な数の書簡[6]を残したことでも知られている。彼は手紙のやり取りによって、友人と文学や文化について論じ合っただけでなく、彼の助言を求める文学青年からの手紙にも返事を欠かしたことはなく、その相手は１千人を超えると言われる。マリオの晩年、彼と親交があった前出のアントニオ・カンディド（Cândido 2004: 91）

は、マリオにとって手紙を書くことは創作や研究活動と同じくらい重い道徳的、文学的責任をともなう任務で、文通は彼の信仰でもあったと述べている。また、マリオが死ぬまで２０年以上にわたる文通を続けた詩人マヌエル・バンデイラの言葉は、マリオがしばしばブラジルモダニズムの法王とよばれるわけを教えてくれる。

> いつも、そしてあらゆる場で、つまり詩、長編小説、短編小説、エッセー、音楽・美術批評において、彼の声はわれわれにブラジル人であることを認識し、ブラジル人らしくふるまうようにという誘いのように響いた。また、それらすべての思索の分野で彼の影響は巨大で決定的だった。今日、ブラジルのすぐれた詩人で、彼から何らかの恩恵を受けなかった者はいない。若い音楽家にとって、彼の助言と批評は真の羅針盤であった。書き言葉について言えば、勇気をもって大胆にもそれを慣れ親しんだ民衆の話し言葉に近づけようとした彼の試みが、若い世代に恩恵を施したことを否定する者がいるだろうか。

バンデイラが語ったように、マリオの精力的な活動の根底にあったのは、ブラジル芸術一般の革新をめざす強い意志と、ヨーロッパばかりに目を向け、自国文化をかえりみないブラジルのエリートたちにその豊かさを「伝道」し、ブラジルのための創作活動をうながすことへの使命感であった。同世代のエリートたちが例外なくヨーロッパへ渡り、そこではじめてブラジルを再発見した一方、経済的な困難もあったとは言え、マリオは生まれ育ったサンパウロ市を生涯ほとんど離れることなく、可能なかぎりブラジ

ル各地を旅し、その土地の口承文学や民俗音楽・舞踊を収集、研究し、書にあらわした。自分が生きる時代と社会に対して抱いていたマリオの強い義務感と責任感は、彼自身認識していたように、しばしばその作品の文学的価値を危うくするものであったが、代わりに深い人道主義的探究心とメッセージゆえの高い価値を作品に付与したとするアントニオ・カンディド(Cândido 1997: 105)の批評は、マリオ文学の重要性をきわめて的確に言い得ていよう。マリオを創作活動に駆り立てた自国と自国民に対する深い愛情、そして悲しみに触れることなしに、彼の作品を十分に理解することは難しい。

第２章　ラプソディー小説『マクナイマ』の誕生

『マクナイマ』はアマゾンで生まれ育った主人公マクナイマの奇想天外な冒険物語である。インディオに語り伝えられた神話をベースに、格言、警句、迷信、ブラジルの地方特有の言語表現、植民地時代に残された文書など[7]を織り込んでつくられたこの作品を、詩人であり音楽家でもあったマリオは小説とよばず「ラプソディー」と名づけた。ラプソディーは古代ギリシャで吟唱された叙事詩を語源とすると同時に、狂詩曲とも訳され、１９世紀にヨーロッパで数多く作られた叙事的で民族的、幻想的な雰囲気をもつ自由な形式の楽曲のこともさす。即興的魅力にあふれた叙事詩『マクナイマ』はまさしくブラジルのラプソディーと言えようが、同時にユーモア、パロディ、風刺に満ちた多義的な作品でもある。

既存のテクストで織りなされ、モザイクやブリコラージュにもたとえられるこの小説が主に拠っているのは、ドイツの民俗学者

コッホ＝グルンベルグがオリノコ川流域に住む先住民から収集した説話をまとめた『オリノコからロライマへ－１９１１年から１９１３年におけるブラジル北部とベネズエラの旅の成果』[8]である。小説の主人公マクナイマが巻き起こす騒動の多くは、この書に集録された同名の神にまつわる話に由来する。マリオが神話にインスピレーションを求めたのは、そこに民族の心理的特徴が表出されていると信じたからであった。彼はコッホ＝グルンベルグのマクナイマに出会ったとき、そこにブラジル人の特性を見出し興奮したと述べている（Lopez 1974: 88）。「偉大なる悪」という意味の名前をもつ、恥知らずでずる賢い神マクナイマの「偉業」に触発されたマリオは、１９２６年１２月、休暇を過ごしていたサンパウロ州内陸部アララクアラの農場でブラジル版マクナイマの初稿を書き上げる。

いかなる作品であれ入念な調査と資料の裏づけを欠かさず、また、いったん作品を書き上げた後も、推敲を重ねるのがマリオの一貫した創作方法として知られる。実際、マリオがコッホ＝グルンベルグの著書に出会ったのは、彼がブラジル人の心理的要素に興味をもち、１９２４年以降、心理学関連の書物をはじめ、歴史学や民俗学の資料などブラジルに関する幅広い文献を渉猟していたときのことであった。また、『マクナイマ』の初版本が出されたのは、初稿完成から１年７ヵ月たった１９２８年７月のことである。一見即興的な魅力にあふれたラプソディー小説『マクナイマ』は、実は綿密な調査・研究と深い思索から生み出されたものであった。

マリオはこの小説の出版にあたってふたつの序文を書いた。最初の序文は初稿完成直後の１９２６年１２月に、ふたつめのそれは初版が印刷機にかけられる直前の１９２８年３月に記されたが、

結局、いずれの序文も作品に添えられることはなかった。前作『愛するという自動詞』(*Amar, verbo intransitivo*)ーマリオはこれも小説とはよばず、「牧歌」(Idílio)と名づけたーが不道徳だとサンパウロのブルジョア社会から大きな非難を浴びたため、当時のモラルに反する内容を含む『マクナイマ』が同様の運命をたどるのを恐れ、解説的な序文をつけようとしたのだが、結局、作品を読者の解釈にゆだねたのである。未完に終わったこれらの序文[9]や当時友人と交わした書簡には、『マクナイマ』創作の意図や執筆過程での作家の興奮、あるいはとまどい、不安が綴られていて、作品の解釈に大きな光を投げかけてくれる。

次のふたつの章では、小説と同じ１９２８年に出されたオズワルドの「人食い宣言」とパウロ・プラドの『ブラジルの肖像』を順に取り上げ、それらと小説との対話をつうじて、マリオが作り出したブラジルのヒーロー、マクナイマの造形を浮かび上がらせたい。

第３章　『マクナイマ』と「人食い宣言」

『マクナイマ』について語るとき、決まって取り上げられるのがモダニズム運動の盟友オズワルドの「人食い宣言」(Andrade 1995: 47-52)である。両者に存在する共通点を否定することはできないが、『マクナイマ』を単純にオズワルドの宣言がつくった「人食い習慣」(Antropofagia)の流れに位置づけることには問題がある。

「人食い宣言」はオズワルドが１９２８年１月の誕生日に、当時の妻で画家のタルシラ・ド・アマラル(Tarsila do Amaral)から贈られた１枚の絵ー後に『アバポル』(*Abaporu*;トゥピー語で「人肉を食べる者」という意味）と名づけられるーにインスピレーショ

ンを受けて書いた宣言文で、同年５月、タルシラの挿絵入りで、文芸誌『人食いの雑誌』の創刊号を飾った。

「人食い習慣だけが我々をひとつにする。社会的に。経済的に。哲学的に」というフレーズではじまるこの宣言は、ブラジル文化生成のあり方を、敵の肉を食べることでその勇気や力を自らのものにするインディオの人食いの風習になぞらえたものであった。オズワルドは「トゥピーであるかトゥピーでないか、それが問題だ」とブラジル人の存在のあいまいさをユーモラスに示唆しながら、「私のものではないものだけが私の興味をひく。人間の法則。人食い族の法則」と、「人食い習慣」の原理をうたう。そして、「生きとし生けるものの母なる太陽の息子たち。移り来た者たちと、運ばれ来た者たちとツーリストたちによって見つけられ、偽善的な郷愁をもって激しく愛された者たち。大きな蛇の国で」と、太陽と大蛇に象徴された熱帯の地で繰り広げられた先住民とポルトガル人植民者や黒人奴隷との遭遇・混交の歴史を詩的言葉でつづる。さらに「我々は教化なんかされなかった。でたらめな法にしたがって生きてきた。我々はキリストをバイア[10]に誕生させた。パラー州のベレンかも。だが我々は決して我々のなかに理論を生まれさせたりしなかった」、「我々は教化なんかされなかった。やったのはカーニバルだった。帝国元老院議員の仮装をしたインディオ」、「我々は復讐という法をもっていた。我々は魔術という科学をもっていた」と、法や科学、キリスト教によるヨーロッパ支配を笑いとばし、ブラジルの非合理性、原始性を称揚する。なぜなら「ポルトガル人がブラジルを発見する前にブラジルは幸せを発見していた」からである。

シンタクスと合理的な意味のつながりを無視した言語表現、原始性を称える美学的態度は、１９２４年の「パウ・ブラジル[11]宣

言」以来、オズワルドが一貫して実践してきたことであるが、それはもともとヨーロッパ前衛芸術の影響を強く受けたものであった。「パウ・ブラジル宣言」での主張を実践すべく、宣言の翌年オズワルドがパリで出した詩集『パウ・ブラジルの詩』(*Poesia Pau-Brasil*)に序文を書いたパウロ・プラドの、「オズワルドはパリ滞在中、クリシィ広場のアトリエの高みー世界の臍（へそ）ーから自分の故郷を発見して驚嘆した」という言葉は、当時ブラジル人エリートの多くがヨーロッパ経由でブラジルへ「回帰」していたことを言い得て妙である。

しかし、ルシア・エレナ(Lucia Helena)が指摘するように、ヨーロッパ前衛芸術の原始主義が単に美学的様式の問題にとどまったのに対し、オズワルドの「人食い宣言」は、ブラジルの「植民の歴史によって踏みにじられた文化の残滓を表面化し、問題とする、寓意的な提案」(Helena 1985: 156)であり、「笑いとユートピアで戦いをいどむ、アナーキーで異議申し立て的なトーンで、原始的な源にもぐりこみ、それを内省へとみちびこうとする」(Helena 2000: 77-78)ものであった。

民族の原始的ルーツにこだわりつつ、外国、とりわけヨーロッパの影響をのみこみ、咀嚼して自らのものにするという人食いのメタファーは、発想の転換によってオリジナルとコピーという対立概念、後者の前者に対する劣等性を溶解し、ブラジルは独自の文化をもたない、あるのはヨーロッパ文化の亜流に過ぎないというコンプレックスからブラジルを一瞬なりとも解放するものであり、知識人によって歓喜をもって受け入れられた。彼らにとって「人食い習慣」は、まさしくベネディット・ヌーネス(Benedito Nunes)が定義したように、メタファーであると同時に、植民地化によって略奪され、抑圧されたブラジル社会の「診断書」であり、

植民地化のプロセスで行なわれた暴力に抵抗するための効果的な「治療法」(Nunes 1978: XXV-VI)であった。

一方、マリオは、「パウ・ブラジル宣言」以来、学識を否定するオズワルドの過激な姿勢に批判的(Lopez 1974: 18)であった。そして出版を間近に控えた『マクナイマ』が「人食い習慣」の主張のなかで語られるのを懸念した。「人食い宣言」が発表された数日後、友人のアルセウ・アモローゾ・リマ(Alceu Amoroso Lima)へあてた手紙でマリオは、「１９２６年１２月に丸々６日間かけて書かれ、１９２７年１月に手直し、加筆された『マクナイマ』がもうすぐ出る。そして、それは完全に人食い的なものだと思われるだろう」(Hollanda 2002: 32)と書き、ただでさえ複雑な問題をもつ小説を、「人食い宣言」がさらに混乱させるであろうと嘆いている。これはオズワルドの宣言への批判があったからだけでなく、マリオが何よりセクショナリズムを嫌ったからである。ブラジル文学史上初のモダニズム作品とされる彼の詩集『狂乱の町サンパウロ』(*Paulicéia Desvairada*)の「すこぶる興味深い序文」("Prefácio interessantíssimo")の冒頭で「狂乱主義」(Desvairismo)を打ち立てたマリオは、序文の終わりでその解散宣言をし、「私は門弟などほしくない。芸術では、流派＝たったひとりの虚栄心のための大勢の愚か者たち」とユーモアと皮肉を交えて芸術におけるセクショナリズムを非難している。

とは言え、『マクナイマ』と「人食い宣言」に存在する共通項を否定することはできない。マリオ・デ・アンドラーデ研究の第一人者テレ・ポルト・アンコナ・ロペスは「両者とも太陽または太陽神ヴェイと結びつけることで、ブラジルを南米と熱帯の現実のなかに位置させ、両者とも原始主義と余暇を価値としている」(Lopez 1974: 19)と述べている。そして、まさしくこのことを理由

にマリオは、『マクナイマ』が自分の意に反して「人食い」の流れに組み入れられようとも[12]、公的な場でそれに反論しようとしなかったのである。なぜなら彼がめざし、またほかのブラジル人芸術家にも期待した「ブラジル性の探究」の意志をオズワルドの宣言のなかに認めたからである。マリオは、あえて差異を強調することで、その流れを分裂、弱体化させることを避けたのであった(Lopez 1974: 18-20)。

しかしながら、オズワルドの「人食い宣言」が人食いの風習をブラジルのダイナミックな文化形成のメタファーとしながら、原始的でユートピア的なブラジル文化を陽気に肯定したのに対し、マリオの『マクナイマ』に人食いの場面が登場するとしても、それはブラジル文化、あるいは民族の本質を表象するものではなく、エピソードに過ぎない。また、カーニバル的哄笑に満ちた主人公マクナイマの造形が浮かび上がらせるのはあいまいなブラジル人像であり、そこに楽観的ナショナリズムを読みとることはできない。それはむしろ、次章で考察するパウロ・プラドが書いた『ブラジルの肖像』の悲観的な見方と響きあっている。

第４章　『マクナイマ』と『ブラジルの肖像』

マリオが『マクナイマ』を年長の友人、パウロ・プラドに捧げていることに注目する研究者はほとんどいない。１８６９年、サンパウロ有数の名家に生まれたパウロ・プラドは、１９２０年代サンパウロでモダニズム運動を推進したマリオやオズワルドら若い作家や芸術家を経済的、かつ精神的に支援した資産家であり、知識人であった。ちなみに、オズワルドも小説『ジョアン・ミラマールの感傷的追想』(*Memórias sentimentais de João Miramar*:

1924)をパウロ・プラドに捧げ、前章でも触れたように、詩集『パウ・ブラジルの詩』を出す際、彼に序文の執筆を依頼している。

１８９０年に渡欧した若かりしパウロ・プラドは、パリに滞在中交流があったポルトガル文学の最高峰エッサ・デ・ケイロスを「青年よ、きみは完璧だ」(Prado 1997: 34)とうならせた知性と豊かな教養、洗練された趣味の持ち主であったが、１８９７年に帰国してからは名門プラド家の長男として、一族が名門シャーヴェス家とともに立ち上げたコーヒー輸出会社や移民事業に専念せざるを得なくなった。５０歳を過ぎて歴史学にめざめ、ブラジル史研究の第一人者カピストラーノ・デ・アブレウ(Capistrano de Abreu)に傾倒、師事し、１９２０年代『エスタード・デ・サンパウロ』(*Estado de São Paulo*)紙に投稿したサンパウロの歴史に関する論説をまとめた『サンパウロ』(*Paulística*)を１９２５年、ブラジル人の民族性に関する歴史的考察『ブラジルの肖像』を１９２８年に出版した。死後、知識人としての活動はほとんど忘れられ、単なるモダニズム運動のパトロンとしてのみその名前を記憶されてきたが、近年再評価の動きが高まり、彼が残した上記の著作はサンパウロ大学カルロス・アウグスト・カリル教授の編集によって相次いで再版された。そのうち本稿で注目するのは、『ブラジルの肖像』である。

「なかば科学的、なかば文学的な研究」(Bosi 1997: 425) の成果である『ブラジルの肖像』は、２０世紀後半、ダンテ・モレイラ・レイテの名著『ブラジル人の民族的特徴：イデオロギーの歴史』(*O caráter nacional brasileiro: história de uma ideologia*) で完膚なきまでに論破された。また、再評価が進む今日においても、それは厳密に科学的な理論と思考にもとづいた論考としてより、むしろ文学的な著述として受けとめられている[13]。しかし、「ブラジルの

歴史と民族的特徴を厳密に心理学的な観点から解釈しようとした初めての試み」(Leite: 289)であったとレイテも認めているように、この書がブラジルのナショナル・アイデンティティーについての議論の流れを理解する上で欠かせない作品であることに異論を唱える者はいないであろう。

『ブラジルの肖像』は、「人食い宣言」と『マクナイマ』に続いて１９２８年１１月に出版された。「ブラジル人の悲しみについての論考」(*ensaio sobre a tristeza brasileira*)というサブタイトルがつけられたこの本は、当時主流だったウファニズモ的ブラジル観を真っ向から否定するもので、言論界に賛否の渦を巻き起こした[14]。

「輝かしい土地に悲しい民族が住む。彼らにメランコリアを遺したのは、その土地を世界に知らせ、住みついた発見者たちであった」(Prado 1997: 53)という印象的な文章ではじまるパウロ・プラドの著作は、ブラジル人は悲しい民族であるという前提に立ち、その悲しみの原因を心理学、社会学、病理学的観点をまじえながら歴史的に解明しようとしたものである。

植民地時代、とりわけ１６世紀と１７世紀に植民者や宣教師、旅行者によって書き残された文献を渉猟したパウロ・プラドは、ブラジル人の心性に悲しみを植えつけたのは、植民者たちを駆り立てたふたつの大きな衝動―淫乱と貪欲であると主張する。それぞれ「淫乱」、「貪欲」と題された第１章と第２章で著者は、熱帯の気候風土に刺激された抑制のない肉欲と金発見への飽くなき野望がいかに植民者の心を支配していたかについて、豊富な史料を引用しながら検証する。そして第３章「悲しみ」において、これらふたつの強い欲望がブラジルの住民たちの精神と肉体をむしばみ、知性や感覚をにぶらせる原因となり、その結果として、個人だけでなく、民族的レベルにおいても、慢性的な疲労感や無気力、

メランコリーという精神病質を生んだ(Prado 1997: 142)とする。また、「淫乱」と題された1章では、ポルトガル人植民者だけでなく、先住民の性的放縦も際だっていたことを指摘し、先住民の節度のない官能性と植民者の退廃が接触したことから、ブラジルのプリミティヴな混血人口が生まれた (Prado 1997: 76) と書いている。

この書は全編をとおしてナショナリスティックな知識人の感情を逆なでするもので、出版直後、大きな反発をまねいた。ジョアン・リベイロ(João Ribeiro)は、事実だが不完全な一部しか描いていない『ブラジルの肖像』には「肖像ではないという欠点がある」(Prado 1997: 223)と強く非難している。一方、オズワルドは、パウロ・プラドの視点がアメリカを「発見」したヨーロッパ人のキリスト教的価値判断に影響されていることを批判しながらも、淫乱で怠惰なブラジルの肖像画が「偽の悲観主義の外皮をつき破る賛歌」で「まさしく我々のもので、まさしく人食い的だ」(Prado 1997: 232)と賞賛している。また、興味深いことに、同じ書評のなかでオズワルドは『ブラジルの肖像』と『マクナイマ』のつながりを指摘し、前者は後者のまさしく「歴史の用語集」(Prado 1997: 229)だと述べている。

オズワルドが指摘したように、『マクナイマ』の主人公は、『ブラジルの肖像』に描かれたブラジル人の民族的特徴ー怠惰、淫乱、無気力、貪欲などーをもっている。マヌエル・カヴァルカンティ・プロエンサ(Manuel Cavalcanti Proença)はふたつの作品の類似点に言及した数少ない研究者のひとりで、その古典的研究書『マクナイマの道程』(*Roteiro de Macunaíma*)で両者に共通する不道徳性に注目し、手短ながら次のように述べている (1987: 15)。

マリオは不道徳な行為を容認していなかったが、マクナイ

マはブラジル人と一致する必要があった。ちなみに、植民地時代の記録を読めば、淫乱が民族的特徴として理解されていたのは周知の事実で、このテーマについてはパウロ・プラドの『ブラジルの肖像』ですばらしい体系化がなされている。
ふたつの作品は非常に似ている。ただ、歴史家において分析であり論説であるものが、我らが民族のヒーローにおいては、行動にうつされているというだけのことである。

プロエンサが指摘した不道徳性は、小説の主人公マクナイマのもっとも顕著な特徴のひとつであると同時に、作家が読者の反応をもっとも恐れた内容でもあった。マリオは１９２６年１２月に書いた序文で、小説に描かれた不道徳性が彼の創作ではないことを強調しつつ、パウロ・プラドについて触れている。(Lopez 1974: 88)

伝説から淫猥な記録をカットすることはできなかった。これらのラプソディー的文学や宣教師の記録文学がしばしばポルノ的で概して官能的だということは、私を驚かせたりはしないが、私の思考を活性化してくれる。例を引くまでもないだろう。無秩序なポルノグラフィーも民族の日常茶飯であるから。私がこの本を捧げる明晰な精神の持ち主パウロ・プラドが、そのことを彼の著書ー私は事前にそれを使わせてもらっているのだがーで強調してくれるだろう。

この叙述から、『ブラジルの肖像』が出版される２年前、マリオがすでにパウロ・プラドの主張を知っていたことは明らかである。ただしそれは、マリオがパウロ・プラドのテーゼにもとづいて『マ

クナイマ』を執筆したというより、ブラジル人の民族性について興味をもったふたりが、同じように膨大な文献を渉猟し、論考を重ねてたどりついた結論が、多くの点で一致していたということであろう。

ふたりは、当時主流だった楽観的なブラジル論には同調せず、自国民をむしろ悲しい民族であると考えていた。ただ、その根拠は必ずしも一致していない。パウロ・プラドにとってブラジル人の悲しみは淫乱と貪欲というふたつの衝動から生まれた病理学的なものであったが、マリオにとってそれはブラジル人に民族的特性がないことから生まれるものであった。では、マリオが考えるブラジル人の特性の欠如とはどういうことなのか、次章で小説をひもときながら考察したい。

第５章　ブラジルの悲しいヒーロー、マクナイマ

『マクナイマ』は１７の章とエピローグからなる。物語は主人公の誕生からはじまり、運命の女性シとの出会いと別れ、失われた宝ーシの形見でお守りの石ーを求めての冒険の旅、宿命の敵との戦い、そして故郷への帰還と展開し、ヒーローの死で終わる。

１９２８年７月に初版本が上梓されるとこのラプソディー小説は大きな反響をよぶ。「われらが民族のヒーロー」(herói da nossa gente) と冠された主人公は怠惰でずる賢く、好色な、むしろアンチ・ヒーローである。その主人公がなぜ「われらが民族のヒーロー」なのか。また、副題の「特性（徳性）のないヒーロー」(herói sem nenhum caráter) とは何を意味しているのか。

副題のあいまいさは “caráter”という言葉の多義性による。英語のキャラクター (character) に相当するこの言葉には性格、特性、

気質という意味のほかに、品格、徳性という意味がある。つまり、副題には「いかなる特性ももたないヒーロー」と「まったく徳性のないヒーロー」というふたつの解釈が可能なのである。いかなるキャラクター[15]ももたないヒーロー、マクナイマは「われらが民族のヒーロー」でもあるため、議論は当然ブラジル人論に発展した。

マリオは最初に書いた序文で、「キャラクターという言葉で、単に道徳的実体を明確にしようとするのではなく、すべてにおいて、つまり、よきにつけ悪しきにつけ、習慣や、行動、感情、進行する歴史のなかに、恒久的に存在すべき心理的本質について理解したいのである」(Lopez 1974: 87)と述べ、マクナイマが「徳性のないヒーロー」であると同時に「特性のないヒーロー」であることを示唆する。

マリオがより深刻な問題だと考えていたのは、ブラジル人に「特性」が欠けていることであった。後に書いた序文で彼は、主人公について「モラルがない、そして特性がないという二重の意味でのキャラクターの欠如。いかにも。私はこの悲観主義なしに同国人の誠実な友人にはなれない。それがこの本のきびしい皮肉なのだ」(Lopez 1974: 92)と書いている。さらに、「うっとりしながら英雄的行為にふけるのは簡単だ」(同)とつづけ、原始性を単なるブラジル文化のメタファーとして無批判に称揚し、現実社会に存在する問題や矛盾を見ようとしなかったオズワルドをはじめとする当時のエリートたちの楽観的ナショナリズムを暗に批判している。

マリオが言う「特性の欠如」とは、相反する心理をもち、心理的に一貫性がないということであった。小説の出版前、マヌエル・バンデイラに宛てた手紙でマリオは、主人公が大蛇の化け物カペイと戦うエピソードをひきながら、ヒーローの特性のなさについ

て「マクナイマは勇敢だったり、臆病だったりする。その心理は個人としても、民族としてもまったく体系化されていない。化け物のカペイに立ち向かい勝利するけれど、切断された頭部から逃げ出してしまう」(Moraes: 359) と解説している。ロペス編『マクナイマ』の序文で文化人類学者ダルシー・リベイロは、主人公を「無邪気だが抜け目がない、飽きっぽいが満たされていない、ずる賢いがだまされやすい、魅力的だがグロテスク、無謀だが安心できる、嘘つきで臆病で怠惰」(Lopez 1997: XX)と評している。

そして、その特性の欠如はマクナイマの肉体的特徴にも見られる。第2章「成人」で、アグーチに魔法のキャッサバの汁をかけられた少年マクナイマは、一気にたくましい肉体をもつ青年へと成長する。ただ、とっさによけた頭部だけは醜い顔をした子供のまま成長できない。これは唯一の弱点のために命を落としたギリシャ神話の英雄アキレウスを思わせるものである。ただ、ブラジルの英雄マクナイマにとってのアキレス腱は頭部であった。成人の肉体に子供の頭部をもつマクナイマは、肉体と精神のアンバランスに苦しむのである。マリオは、ブラジル人の心理と肉体に一貫性がないのは民族としていまだ形成の途上にあるからだと考えていた。

ジルダ・デ・メロ・エ・ソウザ(Souza 1979: 44)は、主人公の不確定性は単に肉体的、心理的なものにとどまらず、文化的なものでもあると主張し、マクナイマの心がふたつの世界、ヨーロッパとブラジルのあいだで揺れていることに注目する。形見の石を求めてブラジルを駆け巡るマクナイマは時おり故郷アマゾンとイカミアバ族の女王で亡き恋人シへの恋しさに襲われ打ちひしがれるが、一方、サンパウロでは近代的な物質文明を享受し、肌の白い娘たちを追いかけ回す。そして、ついに形見の石を取り戻して故

郷へ帰るときには、お守りの石のほかに、サンパウロで購入した外国産のものばかり持ち帰るのである。アマゾンへ戻ったマクナイマは、自分の娘との結婚の約束をないがしろにされて怒りに燃えた太陽神ヴェイの復讐によって永遠に形見の石を失う。マクナイマが空にのぼって星になるという結末は勝利の栄光を意味するのではなく、最後までブラジルとヨーロッパのあいだで揺れた結果、形見の石、つまり生きる理由を失ったヒーローの敗北と幻滅をあらわすものだとするソウザ(Souza 1979: 96-97)の解釈は、人食い小説『マクナイマ』という見方を否定し、むしろ、ブラジル民族に対するマリオの悲観的な視線を浮かび上がらせるものである。

「特性のないヒーロー」マクナイマは作家マリオ・デ・アンドラーデのカリスマ的存在を映し出すかのように「善と悪を越えた存在」、「善と悪をあわせもつ存在」などとあたかも神格化され語られてきた。しかし、その前提となっている、民族は同質で一貫性のある心理をもつべきであるという作家の考え方には問題があると言わざるをえない。相反する心理をもち、矛盾した行動をとるマクナイマは、むしろきわめて人間的な美徳と欠点ー後者の方がはるかに際だっているがーをあわせもつブラジルの民衆の象徴であるように思われる。状況に応じて姿形、心まで変えてしまう「特性のなさ」は、ブラジル形成の歴史のなかでつねに支配され、抑圧され、搾取されてきた貧しい民衆が身につけたしたたかな生き方を表わしていると言えよう。

ヒーロー、マクナイマがさまざまな解釈を受け、ひとつの解釈に収れんされることを拒むのは、ジルダ・デ・メロ・エ・ソウザ(Souza 1979: 97) が評しているように、小説が何らかの確信を最終的なものとして提示しているというより、議論のために開かれたあいまいな場であるからに違いない。そしてそれは、楽観と悲

観のあいだで揺れながらブラジル民族と文化の本質を探究する作家の（無）意識が映し出されているからではなかろうか。

おわりに

１９２０年代、ブラジルのモダニズム文学者たちは、ヨーロッパ前衛芸術の影響を受けながらも、自国の言葉で自国の現実を表現しようと試みた。それは「はじめに」で述べたブラジル人の「自分探し」の系譜に連なるものであった。

２０世紀に入るまで未成熟であった美術と音楽においても、この時代、多くの才能が花開き、ブラジル性を追求した高い価値をもつ作品が創作された。本稿第３章でふれたタルシラ・ド・アマラルもこの時代を代表する画家である。そして、オズワルドとタルシラの関係がそうであったように、ジャンルの境界を越えた若いモダニズム芸術家たちの交流は、時には不調和音を生じさせながらも美しいラプソディーを奏で、ブラジルの色彩に富んだ豊かな作品の数々を生みだしたのである。

モダニズム芸術家たちの創作活動とその成果は、ブラジルの知識人を西欧文化に対するコンプレックスから永遠に解放するものではなかったが、少なくとも熱帯の混血文化をブラジルの現実として受けとめ、それをユーモアや風刺をもって表現する道を切り拓いたと言えるだろう。そしてそのもっとも重要な先駆者がマリオ・デ・アンドラーデであった。

[注]

[1] 本稿は、1999年4月24日（土）、神戸大学で開催された日本ラテンアメリカ学会西日本部会で筆者が報告した「『マクナイマ』にみるブラジル人像ー楽観と悲観のあいだでー」に大幅な加筆をしたものである。

[2] 本稿での引用はすべて筆者が原文から訳した。

[3] イラセマは同名の小説（*Iracema*, 1865年）で若いポルトガル人戦士と恋に落ち、ふたりの間の子供を産んで命を失うインディオ女性で、ペリは『グアラニー』（*Guarani*, 1857年）でポルトガル植民者の娘セシリアを愛し、騒乱のなか最後まで彼女を守り抜く忠実で勇敢なインディオの戦士である。

[4] 1914年、ロバートが『エスタード・デ・サンパウロ』（*Estado de São Paulo*）紙に寄稿した論説「ウルペー」（"Urupês"）で作り上げた架空の人物。タイトルのウルペーとは、きのこのような寄生性菌類のことで、自分では働かず、すべてを運にまかせて生きるジェッカ・タトゥーを象徴する。

[5] ブラジル文学を代表する作家には、マリオ・デ・アンドラーデのほか、オズワルド・デ・アンドラーデ、カルロス・ドゥルモン・デ・アンドラーデといった同姓の作家が存在するため、彼らを指すときにはそれぞれファースト・ネームで呼ぶのが慣わしになっている。本稿でもその慣習にしたがう。なお、これらの作家に親族関係はない。

[6] マリオが受けとった書簡は本人の遺言によって死後５０年間封印されていたが、封印が解けた１９９５年以降、マヌエル・バンデイラやカルロス・ドゥルモン、タルシラ・ド・アマラルらとの手紙のやり取りが完全な往復書簡の形で出版され、作家と作品研究のための貴重な資料となっている。書簡集の出版を中心的におこなっているのは、マリオの遺品の大部分が家族によって寄付されたサンパウロ大学ブラジル研究所所属テレ・ポルト・アンコナ・ロペス教授リーダーとするチームである。

[7] マヌエル・カヴァルカンティ・プロエンサ(Manuel Cavalcanti Proença)の『マクナイマへの道程』(*Roteiro de Macunaíma*)は『マクナイマ』研究者にとって必読の書であり、小説で使われているエピソードや語彙、表現の起源に関する綿密な調査結果が書かれている。

[8] Theodor Koch-Grüngerg, *Vom Roraima Zum Orinoco: Ergebnisse einer Reise in Nord Brasilien und Venezuela in den Jahran 1911-1913*, vol.2, Mythen und Legenden der Taulipang und Arekuna Indianer. Stuttgart: Strocker & Schroder, 1924.

[9] ふたつの序文は、テレ・ポルト・アンコナ・ロペス（Lopez 1974）やエロイーザ・ブアルケ・デ・オランダ(Hollanda 2002)の文献に全文が収録されているほか、ロペス編『マクナイマ』には手稿がファクシミリで掲載されている。

[10] ブラジル北東部に位置する州で、「発見」の地でもある。

[11] パウ・ブラジル（ブラジルボク）は国名の由来となった赤い染料がとれる木の名前である。この木が１５００年の「発見」以降のブラジル史上はじめて海外へ出ていった産物であったことから、ブラジル的な詩を創作し、「輸出」することを唱えたオズワルドがその主張のシンボルとして使ったのである。

[12] 『人食いの雑誌』創刊号でマリオの新作が印刷中であることが予告され、同誌２号では「『マクナイマ』の入会」と銘打って、小説が書店に並ぶより早く、その第１章を全文掲載した。

[13] １９９７年に再版された『ブラジルの肖像』を編集したカルロス・アウグスト・カリルは、その序文でこの本を「良質の小説」、「まれにみる語りの才能に恵まれた偉大な作家の作品」として読まれるべきであると述べている。

[14] カルロス・アウグスト・カリル編『ブラジルの肖像』（１９９７年）に出版当初から１９４０年代までに出た書評数篇が掲載されている。

[15] 日本語で「キャラクター」という場合、特性、性格の意味はあっても、品格、徳性という意味はないが、本稿では便宜上、ポルトガル語の“caráter”、英語の“character”のように両方の意味をもつものとして「キャラクター」という語彙を使う。

[参考文献]

Alencar, José de. *O Guarani*. Cotia: Ateliê Editorial, 1999.

_____. *Iracema*. São Paulo: Ática, 1991.

Andrade, Mário de. *Amar, verbo intransitivo*. Belo Horizonte: Itatiaia, 1986.

_____. *Contos Novos*. Belo Horizonte: Itatiaia, 1999.

_____. *Entrevistas e depoimentos*. Telê Porto Ancona Lopes (Org.). São Paulo: T.A. Queiroz, 1983.

_____. *Macunaíma, o herói sem nenhum caráter*. Belo Horizonte: Villa Rica, 1991.

_____. *Poesias Completas*. Belo Horizonte: Villa Rica, 1993.

Andrade, Oswald de. *A utopia antropofágica*. São Paulo: Globo, 1995.

_____. *Do pau-brasil à antropofagia e às utopias*. Rio de Janeiro: Civilização Brasileira, 1978.

_____. *Poesias reunidas*. Rio de Janeiro: Civilização Brasileira, 1978. (Obras Completas de Oswald de Andrade. vol. VII.)

Aracy, Amaral (org.). *Correspondência Mário de Andrade & Tarsila do Amaral*. São Paulo: Edusp: IEB: USP, 2001.

Azevedo, Aluísio. *O cortiço*. São Paulo: Ática, 1989.

Bandeira, Manuel. *Poesia completa e prosa*. Rio de Janeiro: Nova Aguilar, 1996.

Barreto, Lima. *Triste fim de Policarpo Quaresma*. São Paulo: Scipione, 1999.

Boaventura, Maria Eugenia. *A vanguarda antropofágica*. São Paulo: Ática, 1985.

_____(org). 22 por 22: *A Semana de Arte Moderna vista pelos seus contemporâneos*. São Paulo: Edusp, 2000.

Bosi, Alfredo. *História Concisa da Literatura Brasileira*. São Paulo: Cultrix,1997.

Brito, Mário da Silva. *História do modernismo brasileiro: antecedentes da Semana de Arte Moderna*. Rio de Janeiro: Civilização Brasileira, 1997.

Cândido, Antônio. *Literatura e Sociedade: estudos de teoria e história literária.*. São Paulo: Ed. Nacional, 1985.

_____. *O observador literário*. Rio de Janeiro: Ouro sobre Azul, 2004.

_____ e José Aderaldo Castello. *Presença da Literatura Brasileira: História e Antologia*. Vol. 2. Rio de Janeiro: Nertrand Brasil., 1997.

Celso, Affonso. *Porque me ufano do meu país?* Rio de Janeiro: Laemmert, 1901.

Duarte, Paulo. Mário de Andrade por ele mesmo. Prefácio de Antônio Cândido. São Paulo: Hucitec/Secretaria de Cultura, 1985.

Helena, Lucia. *Modernismo brasileiro e vanguarda*. São Paulo: Ática, 2000.

_____. *Totens e tabus da modernidade brasileira: símbolo e alegoria na obra de Oswald de Andrade*. Rio de Janeiro: Tempo Brasileiro; Niterói: Universidade Federal Fluminense, 1985.

Hollanda, Heloísa Buarque de. *Macunaíma: da literatura ao cinema*. Rio de Janeiro: Aeroplano, 2002.

Leite, Dante Moreira. *O caráter nacional brasileiro: história de uma ideologia*. São Paulo: Pioneira, 1983.

Lobato, Monteiro. *Urupês*. São Paulo: Brasiliense,

Lopez, Telê Porto Ancona (org.). *Macunaíma, o Herói sem Nenhum Caráter*. Edição Crítica. São Paulo: ALLCAXX/Edusp, 1996.

_____. *Macunajíma: a margem e o texto*. São Paulo: HUCITEC, Secretaria de Cultura, Esportes e Turismo, 1974.

_____. *Mariodeandradiando*. São Paulo: HUCITEC, 1996.

Moraes, Marcos Antonio (org.). *Correspondência Mário de Andrade & Manuel Bandeira*. São Paulo: EDUSP: IEB, 2000.

Nunes, Benedito. "Antropofagia ao alcance de todos." In: *Do pau-brasil à antropofagia e às utopias*. Oswald de Andrade. Rio de Janeiro: Civilização Brasileira, 1978.

Prado, Paulo. *Paulística etc*. São Paulo: Companhia das Letras, 2004.

_____. "Poesia Pau-Brasil." In: *Poesias reunidas*. (Obras Completas de Oswald de Andrade vol. VII.) Rio de Janeiro: Civilização Brasileira, 1978.

_____. *Retrato do Brasil: ensaio sobre a tristeza brasileira*. São Paulo: Companhia das Letras, 1997.

Proença, Manuel Cavalcanti. *Roteiro de Macunaíma*. Rio de Janeiro: Civilização Brasileira, 1969.

Sousa, Gilda de Melo e. *O tupi e o alaúde: uma interpretação de Macunaíma*. São Paulo: Duas Cidades, 1979.

Telles, Gilberto Mendonça. *Vanguarda européia e modernismo brasileiro*. São Paulo: Vozes, 1992.